

目黒紀夫著

## 『さまよえる「共存」とマサイ——ケニアの野生動物保全の現場から——』

新泉社 2014年 433+xviiiページ

やす だ あき と  
安 田 章 人

## I

アフリカから遠く離れた日本に住む我々も、アフリカに生息する野生動物の姿を、メディアを通して容易に目にすることができる。昔でいえばテレビ番組『野生の王国』、最近ではBBCが製作した映画『アース』や『ライフ——いのちをつなぐ物語——』などが思いつくだらうか。一方で、「先進国」から来た日本人が、「秘境」と形容されたアフリカ各地に住む人びととともに暮らす姿を描いたテレビ番組も増えてきているように思う。

ところが、なにか違和感を覚える。それは、どの映画や番組においても、アフリカの野生動物と人々を同時に登場させていることが少なく、まさに本書の冒頭で引用されているように（22ページ）、両者があたかも別々の世界に住んでいるような印象をもたせるからである。著者も調査地であるケニアを実際に訪れるまでは、「ライオンやゾウのような『野生』の肉食動物・大型動物と、マサイのような『伝統的な』人びとがどのように共存しているのか、……まったく想像できないでいた」（23～24ページ）という。

「人間と野生動物の共存」という考え方は、いまや我々にもなじみ深いものとなった。また、野生動物保全政策において、地域住民を「保全活動の担い手」とし、「コミュニティ（地域社会／共同体）が主体となって人間と野生動物の共存をめざす保護活

動」（2ページ）を指す「コミュニティ主体の保全」（community-based conservation: CBC）が世界中で目指されている。「地域住民とともに野生動物を護り、共存を目指す」という考えは、国内外の研究者、実務者、行政関係者の間で、もはや共通認識となっているといっても過言ではなく、「人と野生動物の共存」における一種のメルクマールになっているともいえる。

しかし、「共存」とは、なにか。そしてCBCとは、いったいどのようなものであるか。この議論に関する社会科学的研究として、既存の環境社会学や農村計画学、そして、近年登場した「ヒューマン・ディメンジョン」（human dimension, 野生動物管理に関わる人間社会の側面）という学術的・政策的アプローチもある。しかし、これらの体系的な議論は、まだまだこれからという段階である。つまり、野生動物保護が喫緊の課題とされる現代社会において、「地域住民とともに野生動物を護り、共存を目指す」という考えが一般的になりつつも、それを本質的に考察するための議論は始まったばかりであるといえる。

こうした研究動向に対し、本書は、「共存」とCBCに関する諸分野におけるこれまでの議論を整理したうえで、ケニアを事例に実証的な考察を行い、野生動物と「共存」している人々と、そこで取り組まれているCBCの実態と課題を描き出した。これは、まさに、まだ黎明期を迎えたばかりの野生動物管理における「人と野生動物の共存」に関する社会科学および学際的な議論において、先駆的な取り組みといえる。本書は、400ページを超える大作であるため、分量の関係上、かいつまんで内容を紹介したい。

## II

本書は、2011年に東京大学に提出した博士論文を大幅に修正したうえで2014年に刊行され、序章と終章を含めて、全8章から構成されている。

序章では、「共存」とCBCに対する2つの疑問を本書の出発点として示している。それは、①CBCはどうやって共存を実現しようとしているのか、②CBCによって実現されている共存をどのように考えるべきなのか、というものである。コミュニティを

主体とした野生動物保全における新パラダイムには、CBCのほか、数多くのアプローチが存在する。しかし、それらの差異や対立が整理されておらず、「共存」とはなにかについて議論がなされてこなかったことを著者は指摘する。そのため、著者は、ケニア南部に暮らすロイトキトク・マサイと野生動物の関係と、そこで展開されているCBCを事例として取り上げ、2つの疑問に対する答えを求めた。

第1章では、2つの疑問を解き明かしていくための「地ならし」を行っている。具体的には、CBCの特徴、CBCを分析するための項目、「共存」「コミュニティ」「主体性」の概念を整理・把握し、事例を分析するための視点と検討課題を確認している。まず、新パラダイムの数々は「住民が関わる」という点では共通しているものの、ひとつに収斂しておらず、そのなかでCBCは、地域住民を保全の中心的な担い手として位置づけ、「人間と野生動物の分断から共存へと転換」(71ページ)を目指すものであったとしている。つぎに、CBCを分析する項目として便益、権利、対話と、それらの相互関係を挙げ、地域社会がどのような「内在的な開発」(地域社会が歴史的、地域的な文脈のなかでの状況に応じた生活改善の試み)を志向してきたのかを検討する必要性についても指摘している。また、野生動物管理学、環境社会学、文化人類学における論点を参照し、マサイと野生動物の関係を考察するときに、彼らの関係の内実と歴史を明らかにし、その結果、彼らが目指そうとしている「共存」と、政策が目指す「共存」の整合性について議論を進めることを標榜している。最後に、定義することが難しい「コミュニティ」という言葉が表象される際に発現する利害関係者の政治的意図などに留意しつつ、「環境統治性」「位置取り」「切迫した開発/内在する開発」をいう対概念を加え、ケニアの事例において、「地域社会あるいは個々の住民が何を目的にどのような行動を選択してきたのか」(107ページ)を分析している。

第2章では、マサイ社会における暮らしの変化、ケニアにおける野生動物保全の歴史、そして本書の舞台となるロイトキトク地域を紹介している。ケニアは、植民地支配下における「要塞型保全」の拡大から、狩猟の全面禁止、1980年代後半からの「コ

ミュニティ主体の保全」への転換という野生動物保全の歴史をもっている。そのなかで、ロイトキトク地域に住むマサイたちは、1974年のアンボセリ国立公園設定による土地収奪、開発援助の拡大を受けつつ、集団ランチ制度の導入と、細分化することによる土地の私的所有権の獲得、そして農耕化を進めてきた。

第3章以降は、いよいよ具体的な事例の検討に入る。まず第3章では、キマナ・コミュニティ野生動物サンクチュアリの盛衰が取り上げられた。このサンクチュアリは、住民は便益を獲得することで保全活動へ参画することを大前提とする「便益基盤のアプローチ」として始まり、「地域コミュニティの完全な参加と関与」が実現されていると考えられていた。しかし、やがて外部資金の途絶と観光収入の減少を受けて、集団ランチは経営管理権を外部の観光会社に委託する。その結果、住民はより多くの経済的便益を獲得し、野生動物保全に対しても肯定的な態度を示していた。しかし、農耕を行う彼らが求めるのは、CBCが目指す野生動物との「共存」ではなく、むしろ旧パラダイムのような「分断」であった。つまり、保全の意味や「コミュニティ主体」という目標がステークホルダーの間で共有されなければ、保全に逆行する結果を生み出す可能性がある事実が示された。

第4章では、NGOが主導して立ち上げたオスブコ・コンサーバンシーの事例を取り上げた。土地使用料を誘因とする「便益基盤のアプローチ」を踏襲しながら、意思決定において私的所有権を前提とした「コミュニティ主体の自然資源管理」(community-based natural resource management: CBNRM)のような「権利基盤のアプローチ」を部分的に採用している事例として紹介している。オスブコ・コンサーバンシーは、その設立の前後にNGOと土地所有者である住民との間で多くのトラブルをおこし、設立後も観光活動に積極的に関わろうとする住民は少なかった。この事象がおこった原因として、まず、権利や契約などの近代的な概念に「不慣れた住民」と、対話と住民の意思決定を軽視した「不親切な外部者」(218ページ)の存在が挙げられた。そして、住民たちは、観光業を低く評価する一方で、食料獲得のための農業と牧畜を重視していることが指摘された。また、コンサーバンシー

の設立・運営のために外発的に設けられた権利や契約の条件をクリアできない住民は、「個人の権利の裏返しとしての責任を果たさない存在」(261ページ)として排除され、恣意的に選択した住民を組織化することで、新自由主義にとって理想的な統治を進めようとする「新自由主義的な環境統治性」の特徴がみられた。

第5章では、ふたたび舞台をキマナ・サンクチュアリに戻し、改めて野生動物保全における対話に関する考察が行われている。

章の前半では、給料の遅配と観光集落の利用停止を原因とした観光会社との契約終了と、新たな契約企業の選定という一連のプロセスを通して、企業と地域社会の関係と地域社会内における合意形成について詳究している。住民たちは、第4章のコンサーバンシーの場合と比較して、獣害対策の要求など外部の観光会社に対して積極的に交渉を行った。一方で、地域社会内においては、支持する候補会社がランチ運営委員会の幹部内で割れたことにより、対立と軋轢が生じるようになった。結局、混乱に国会議員が介入することで、対立に巻き込まれていなかったが、住民からの支持が少なかった第3候補が新たな契約企業として選ばれ、地域社会内の対立によって運営委員会はメンバーからの正統性を失った。そして、彼らが積極的に要求していた野生動物による家畜被害への補償の確約も得られなかった。

後半では、ケニア野生動物公社(Kenya Wildlife Service: KWS)やCBCを推進するNGOの関係者(「保全主義者」, 292ページ)と住民の間の対話に注目している。身近な野生動物(ゾウ)の脅威を訴える住民と、動物孤児院を引き合いに友情による野生動物との「共存」を訴える保全主義者の間には、「野生動物との共存」に関する認識が根本的に違っていた。しかし、両者は「CBCによって便益を拡充させる」という方向性が一致しているため、「共存」に関する議論は共同して棚上げされてしまっていた。

第6章では、最後の事例として、1人の青年がアフリカスイギュウに襲われ死亡した事件を発端としておこった「アンボセリ危機」を取り上げている。マサイらによる報復行為としての狩猟、当局がおこしたマサイに対する暴力行為により事態は混沌とし、それを機にKWS長官と「コミュニティ」が対

話する集会が設けられた。しかし、野生動物保全が大きな経済的・政治的権益に関わる状況下では、住民が野生動物との間でもつ緊張関係・軋轢は言及されず、住民は「問題の当事者」や「コミュニティの代表」として表象されることもなく、「『聴く』ことはおろか『語る』相手でもなく、一方的にとるべき行動を『教える』対象」(349ページ)としてとらえられていた。

章の最後には、共存のための行動を教育されるべきとみなされたマサイと、野生動物(ゾウとライオン)は、そもそも、どのように同じ土地で暮らしてきたのかについてひもとき、マサイと野生動物の歴史的な関係について解説している。ここで指摘されたのは、マサイと野生動物は互いに攻撃し合うことで一定の距離を保ち「共存」してきた歴史的事実を、「狩猟せずとも共存できる」と語った保全主義者がまったく理解していないことであった。

終章では、これまでの議論と事例を整理し、本書の出発点であった2つの疑問への答えを出している。

まず、①CBCはどうやって共存を実現しようとしているのか、についてである。ロイトキトク地域では、1960年代から現在まで、第3章から第5章までみてきたようにさまざまなプロジェクトによって、「権利基盤のアプローチ」が部分的に踏襲されつつ、「便益基盤のアプローチ」が中心にとられてきた。また、保全主義者と地域社会の対話の機会も増え、「招かれた空間」(86ページ)が設けられるようになった。しかし、保全主義者たちは、「コミュニティ」の声を捨象し、姿を恣意的に創りあげる「偽りの表象」を行い、住民が問題とする野生動物の害や危険性を問題化しなかった。一方で、彼らが考える「共存」を、暴力と責任によって地域社会に押しつけ、「規律的、新自由主義的、主権的な環境統治がさまざまに試みられて」(382ページ)いた。

つぎに、②CBCによって実現されている共存をどのように考えるべきなのか、についてである。これまでのさまざまなプロジェクトと環境統治に対して、住民は一方的に服従するのではなく、拒絶、受容、交渉と態度を変化させ、享受する便益を最大化できるよう行動してきた。しかし、住民は、CBCがどのような意図のもとに取り組みられているのかを踏

また「位置取り」までは行えておらず、彼らの受苦の想いや訴えは、一連のCBCプロジェクトによって「共存が実現されているとき、……『聴か』れないという以前に、彼ら彼女らが声を発しているという事実それ自体が見捨てられて」(389ページ) いたと結論づけている。

### Ⅲ

ここからは、私の本書に対する感想とコメントを2点ほど書かせていただく。

まず1点目は、本書は、綿密なフィールドワークによって、野生動物保全が展開される地域社会の現場をありありと描き出していることである。本書は、10年にもわたる聞き取りやアンケート調査によって、ケニアで野生動物の保全と観光利用をめぐる渦巻く、グローバルとナショナル、ローカルの間の軋轢、相克、結託、受容という人間模様を詳細に叙述している。「現場を知らないままに人間と野生動物の共存をめざすことがどれほど危険なものであるか、本書をとおして考えて」(9ページ) ほしいと述べる著者の強い意志が伝わってきた。

欲を言うと、重要な利害関係者のひとつであるNGOや観光会社について、「彼らがどのように語り」、そして「姿を変化させてきたのか」という描写があればよかったと思う。理由を述べると、まず前者については、便益還元や保全活動に関して、住民の怒りに満ちた声を取り上げられる一方で、NGOや観光会社の関係者の語りが少なかつたように思われるためである。とくに現場のスタッフや代表者が、住民の声や行動に対してどのように応答したのか、あるいは調査者にどのような想いを吐露したのかが気になることである。つぎに後者については、住民が野生動物保全における「主体」として変貌していったように、NGOや観光会社も、KWSや住民に対して現す姿を少なからず変えてきたのではないかと推察できるためである(關野[2014]参照)。こうした点が描かれていれば、野生動物保全が展開される現場のダイナミクスがさらに伝わったのではないかと考える。

2点目として挙げるのは、本書は単なる「事例報告本」にとどまっていないことである。自然保護や野生動物保全を社会科学的に考える分野には、日本

国内では環境社会学、人類学、政治学などがあるが、いずれの分野においても、このテーマを扱う研究者は少なくともマジョリティではない。とくにアフリカでフィールドワークを行い、野生動物保全の現場から「人間と野生動物の共存」について考察を行う環境社会学者は、著者と私を含めても5人ぐらいしか思いつかない(失念している方がいれば申し訳ない)。いずれも博士論文をもとにした単著を出版しているが、本書のように事例に入る前に、これだけ重厚な理論武装と分析視角の検討を行った例はほかにはない。フィールドワークを基盤にした地域研究(者)の弱点として、事例の面白さにばかり目がいき、「視野狭窄」[菅原2006, 146]に陥ることが挙げられる(これは自省でもある)。しかし、著者は、ケニアの事例へと進む前に、海外および国内の先行研究を幅広く取り入れ、「熟議」「新自由主義」「便益と権利」「合意形成」「共存」「コミュニティ」「主体」について考察を行っている。これは、本書を単なる「事例報告本」にとどまらせていないことに加え、関係する学問分野に新たな視野と考察を与える可能性をもつ結果となっていると考える。

しかし、「だからこそ」なのであるが、本書において明らかにされたケニアの事例で得られた成果は、どのように関連する学問分野にフィードバックできるのかという点について、終章で触れてもらいたかったと思う。著者は、「『共存』再考」という主題の論文を本書と同じ年に発表している[日黒・岩井2013]。そこでは、「野生動物と『近い』関係にいる住民は被害を許容し、『害獣』との『共存への意志』を抱きうる」という、環境社会学における人間と野生動物の関係に関する既存の議論に対して、ケニアとタンザニアの事例を挙げ、批判を含めた検討を行っている。このような検討が、本書でも行われていたならば、さらによかったと貪欲に考えてしまう。なぜならば、本書は、野生動物保全に関する概念ではなく実態を描くことを目的としており(30ページ)、その結果は、引用した既存の概念に対する有効なインパクトを与える展開力と応用力をもっていると評価するためである。

原生自然保護への回帰を求める動きもみられるが、今後、地球環境、自然、野生動物の保護・保全をめぐる議論において、CBCを中心とした、発展途



上国における地域社会との関わりに対する実証的な研究はますます重要となってくるだろう。そうした動向のなかで、本書は間違いなく最重要文献のひとつとなる。開発途上国研究を行うすべての人に、ぜひ手に取っていただきたい良書である。

文献リスト

菅原和孝編 2006.『フィールドワークへの挑戦——「実

践」人類学入門——』世界思想社.

關野伸之 2014.『だれのための海洋保護区か——西アフリカの水産資源保護の現場から——』新泉社.

羽山伸一 2001.『野生動物問題』地人書館.

目黒紀夫・岩井雪乃 2013.『『共存』再考——東アフリカ2地域社会における人間－野生動物関係の分析から——』『環境社会学研究』(19)127-141.

(九州大学助教)